

宮戸・野蒜地域の文化遺産の再生・活用検討事業報告書Ⅰ



松島湾沿岸の古代製塩遺跡

企画展 松島湾の塩づくり

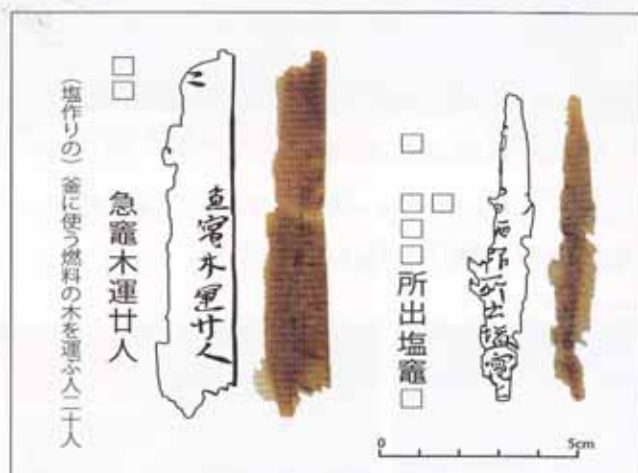
2016. 3.19 → 6.19
奥松島縄文村歴史資料館

1. 陸奥国府多賀城と塩づくり

松島湾沿岸では、縄文時代晩期から海水を土器で煮詰めてつくる「塩」を採る製塩がおこなわれてきました。陸奥国府が多賀城に置かれた古代、とくに平安時代の初め頃(9世紀代)には、湾内の小さな半島や島の小さな浜の140ヶ所(遺跡)で塩づくりがおこなわれていたことが明らかになっています。

多賀城跡からは、「所出鹽竈」「急竈木運廿人」と記す木簡が出土しています。これは「塩作りの竈に使う薪を運ぶための人夫20人を至急派遣してくれ」という請求文書で、塩の生産が国府多賀城の管理の下におこなわれていたことを示しています。

製塩土器は、多賀城跡や多賀城と密接な関わりをもつ周辺の遺跡からも出土しており、松島湾沿岸は多賀城に「塩」を供給する一大生産地であったと考えられています。



製塩に関わる木簡(多賀城跡出土、9世紀)

4. 仙台藩の塩づくりとその後

江戸時代の初期、仙台藩に「入浜式製塩法」が導入されると、亶理郡鳥屋崎浜、牡鹿郡渡波をはじめ領内各地に次々と塩田が開拓されていきました。領内の生産量は年間20～30万俵程でしたが、藩の専売政策のもとに厳重な統制がなされていました。

野蒜の塩田は、安永7年(1778)奈和良元直によって東齋浜(東名浜)に25町歩(約25ha)の塩田(東名長浜塩田)が開拓されたことに始まります。幕末から明治にかけて、隣接した亀岡に塩田(東名塩田)が開拓され、塩田の面積は49町歩(約49ha)にまで拡大されましたが、松島湾に直面しているため津波等の被害を受けやすく、大正15年(1916)には38町歩余りが廃止、昭和5年(1930)には全塩田が廃止されました。

その後、戦時中から戦後にかけて一部復活し、「流化式塩田」への転換もおこなわれましたが、技術的にも経営的にも成果をあげることができず、昭和34年(1959)野蒜の塩田は全面的に廃止されました。

『奥松島縄文村歴史資料館』より転載



野蒜塩田跡(大正4年頃)

昭和初め頃の野蒜塩田全景
(「野蒜名勝繪はがき」菊地商店発行)

仙台城下「町人列伝」③

仙台市博物館
市史編さん室 菅野 正道

仙台城下で最も早く
味噌の販売を行った豪商「真壁屋」

仙台味噌の発祥と真壁屋

城下町仙台の伝統を受け継ぐ物産といえ
ば、やはり仙台味噌がその代表格になるで
しょうか。その生産は伊達政宗のころから
行われていたと伝えられ、仙台の物産の中
でも古株であることは疑いありません。

伊達政宗と味噌のかかわりについては、
朝鮮出兵の際に政宗が持参した味噌が変質
せず、諸大名の間で評判になったという話
が知られています。しかし、この話は典拠
が不明という大きな問題を抱えています。
少なくとも、私の見た限りでは、仙台味噌
の由緒を記した江戸時代や戦前の文献で、
この朝鮮出兵時の逸話を記したものに、ま
だ出会ったことがないのです。これまで見
たところでは、この話が載った最も古い本
は昭和三十年代前半のもの。しかし、出典
は書かれておらず、何らかの伝承を受けた
可能性も完全には否定できませんが、学術
的には歴史的事実とは、とても認定できな
い状況です。

一方、仙台城下で最も早く味噌の販売を
行ったのが、今回の主人公である真壁屋と
言われています。真壁屋は、江戸時代に仙
台城下国分町に屋敷を構えた商人で、寛永
三（一六二六）年から味噌の販売を行った
と伝えられています。真壁屋は、その後、
藩の味噌御用を勤め、川内にあった御塩増

蔵（こえんそくら）での味噌製造に携わり、
また塩問屋を命じられ、領内の塩を一手に
取り扱ったといわれています。

豪商と町役人という二つの顔

真壁屋は、味噌だけではなく、後には醬
油の製造や酒造も行いうようになり、仙台城
下でも指折りの豪商として成長を遂げます。
江戸時代中期以降、藩財政が逼迫（ひっば
く）する中では、しばしば藩に献金や資金
融資を行い、寛政六（一七九四）年時点で、
その総額は約六千両にも及んでいます。ま
た真壁屋は、飢饉（ききん）や火災によつ
て経済的に困窮した人々に対して多額の経
済支援を行いました。藩はそのような功績
に対して、商人であるにもかかわらず禄（ろ
く）を与え、「諸役御免（しよやくごめん）」
（租税を免除すること）や「古木
（ふるき）」の名字を許すなどの特
権を与えたのでした。

この時期の仙台藩は、財政立て
直しや領内の経済活性化のために、
さまざまな特産品の開発政策を進
めていました。と言っても、藩役
人の力だけでは政策の具体化は難
しく、実際には商人や豪農、網元
といった人々が、実際の施策の推
進力となっていました。真壁屋も
藩内から産出される特産物の専売

や殖産事業にかかわる「国産方係（こくさ
んかたかかり）」に任じられています。

このように、仙台城下を代表する豪商と
なった真壁屋は古木家は、同時に町の行政
にかかわる町役人としての顔も持っていま
した。仙台城下の各町には、検断や肝入と
いった町役人が住人の中から選ばれて町政
に当たっていました。そのほかに町の中で
古い由緒を持つ有力な家が検断、肝入を補
佐することもあり「古人（こじん）」など
と呼ばれていました。古木家はこの「古人」
の筆頭に位置づけられ、また序列としては
肝入よりも上席の格付けを藩から許されて
いました。

三月号で紹介した佐藤助五郎もそうで
したが、江戸時代や明治時代の豪商には、
商売で得た財産は社会に還元すべきものと
いう意識が強く存在していたようです。飢
饉などの際に多額の救済金を提出し、藩財
政立て直しのために膨大な額の献金を行っ
たのは、真壁屋に限りません。彼ら豪商た
ちの役割は、経済的な面だけではなく、政
治も含めた社会全般に広く及んでいたこと
を忘れてはならないのです。



御塩増蔵（こえんそくら）があった川内・仲の瀬橋のたもとに
建てられた「仙台みそ発祥の地」の記念碑

「飛翔」2009年5月号より転載

仙台市国分町5丁目 真壁屋市兵衛 「仙台味噌」、塩問屋、「御塩増蔵」、古人筆頭、組頭など

明治29年 仙台市法務局所蔵 土地台帳より

肴町より21間の間口（約40メートル）

古木孝三郎、貞吉、安之助名義の土地 1171坪

仙台市東一番丁 古木孝三郎、貞吉、安之助名義の土地 81坪

合計1,252坪所有